様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23 年　6 月　3 日現在

機関番号：32414
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　2008 年度　～　2010 年度
課題番号：20592513
研究課題名（和文）　看護大学生の自己教育力と親子間の心理的距離との関連に関する研究

研究課題名（英文）　Relationship between the Psychological Distance of Parent and Child and the Self-educational Ability in the Nursing University Student

研究代表者
小林　紀明（KOBAYASHI NORIAKI）
目白大学・看護学部・准教授
研究者番号：10433666

研究成果の概要（和文）：看護師を目指す大学生の成長発達過程における人間形成要因（親子間の心理的距離）が、自己教育力(SE)にどう影響しているかを、全国の大学生を対象にアンケート調査を実施した。調査方法は、親子間の心理的距離を、父母からの肯定的な関わり＝肯定的評価群と否定的なかかわり＝否定的評価群に分類し、自己教育力測定尺度(4 側面)による平均得点を看護学部生(N)と他学部生(O)で比較分析した。心理的距離の平均得点は父母ともに N が有意に高かった。また、N は、父からの肯定的評価群が SE の 4 側面で、母からの肯定的評価群が 2 側面で有意に高く、O は有意な差はなかった。N は親との心理的距離が近いと推測され、それが SE の向上に影響している可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：I carried out questionary survey for university students of the whole country how the human being formation factor (psychological distance between parent and child) in the growth development process of the university student to be a nurse influenced self-educational ability (SE). The investigation method classified the psychological distance between parent and child as affirmative relation = affirmative evaluation group from parents in the negative relation = negative evaluation group, and a comparison analyzed the scoring average by the Standard to measure a self-educational ability (4 sides) in nursing undergraduate (N) and other undergraduates (O). As for the scoring average of the psychological distance, “N” was significantly high in parents together. In addition, affirmative evaluation group from father was 4 sides of “SE”, and affirmative evaluation group from mother was significantly high in “N” at 2 sides, and, in “O”, there was not the meaningful difference.It was supposed that “N” was close in the psychological distance with the parent, and the possibility that it influenced improvement of “SE” was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	100,000	30,000	130,000
総　計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：医学薬学
科研費の分科・細目：看護学・基礎看護学
キーワード：看護教育学

１．研究開始当初の背景

近年、少子高齢化現象に伴う現代の若者気質として、人間関係の間接化・希薄化や親の過剰な期待・過干渉などが問題として取り上げられている。文部科学省の高等学校中途退学者数等の状況調査（2005）によると、全学生数に占める中途退学者の比率は、平成５年以降再度増加傾向を呈し、現在は高止まりの

状態にある。その理由の多くは“熱意がない”“興味がわかない”などで、「目的意識の喪失」「学習意欲の低下」と言われている。平成14年度から19年度までの6年間の学校基本調査（2008）の結果では、大学・短大・専門学校の学生数は平成 16 年をピークに減少しているが、休学者数は 0.8%前後を推移し減少傾向にない。19年度は学生数の減少に反して、大学と高等専門学校では休学者数が増加している。こうした問題は、数の増減で一律に評価することはできないが、大学全入時代に於いて、中退者や休学者が減少しないという現状は大きな教育課題である。この状況に対して、学校教育そのものの在り方だけを問題視するのではなく、現代の若者気質や家庭環境の問題・人間関係なども誘因の一つとして考えなければならない。

Bruner（1986）は、学習にみられる子供の受け身の姿勢を「観覧性」ということばで表現し、ちょうど劇場やテレビでドラマをみるようなつもりで、教師の話をきく受動的な子供が増加していることを、学校だけの責任ではなく家庭、社会生活にも原因があると指摘している。また、梶田（1985）は、自ら学び自己を成長させていく力（＝自己教育力）を、1〕成長･発展への志向、2〕自己の対象化と統制、3〕学習の技能と基盤、4〕自信･プライド･安定性、の 4 側面で構成し、「自信を持っているか、プライドを持っているか、心理的に安定しているかによって人は主体的であるかどうかが決定する」と述べている。この概念は、これまで多くの研究者によって測定尺度として用いられ、その信頼性・妥当性が検証されている。一方、木澤（2004）の研究によると、親から与えられる子供への期待が、子供にとって肯定的に受け止められるものであれば、子供の学習や生活全般への意欲や自信につながり、期待されていないと感じる子供は不安を自覚し生活に張りがなく暇を持てあましている、という報告がある。これらの先行研究を総合的に判断すると、自己教育力の育成には親のかかわり方が影響している可能性が考えられる。よって、自己教育力の不足によって起こる目的意識の喪失や学習意欲の低下は、親と子の関係性（親子間の心理的距離）と関連が強いのではないかと考えた。

看護教育の現場では、国家資格を得るための専門職を育成することを主な目的としている。従って、看護系の学校へ入学を希望する学生は、一般の学生と比較し目的意識が高いと言われている。また、少子高齢化や医療の高度化に伴う様々な社会的状況の中で、医療や看護を必要とする人々が持つニーズに対して看護職に求められる能力は、知識や技術の蓄積だけでは対応できない。つまり、看護職者には、継続して生涯専門職として学び続けられる資質が問われているのである。この資質とは、主体的に学ぶ意志・態度・能力である“自己教育力”の育成を意味すると考える。自己の経験に鑑みても、看護学生は臨地実習での学習過程を通して高度な人間関係スキルの獲得を余儀なくされ、徐々に自己の内面で葛藤を引き起こし、対人関係にストレスを感じて休学あるいは退学の道を選ぶケースが多い。このような現状に直面したとき、学生の行動の根本には、育ってきた環境、すなわち両親との関係〔親の過剰な期待・過干渉、あるいは無関心や否定的な関わり〕が影響している可能性は十分に考えられる。現在の看護教育は、こうした背景を持つ学生に対して看護専門職を育成するための教育とは何か、という課題に直面している。

２．研究の目的

自己教育力と親子間の心理的距離との関連を分析し、専門職である看護師を目指す学生の、成長発達過程における人間形成要因（親子間の心理的距離）が現在の自己教育力にどう影響しているかを、看護学部と他学部の比較から検証する。

３．研究の方法

(1)研究対象

平成 20 年度の全国の看護系大学と看護系以外の全大学学部を無作為に抽出した合計 950 大学学部の中から、調査協力の回答が得られた 55 大学 58 学部 15,405 人の学生を対象とした。

(2)調査期間

平成 20 年 6 月から平成 21 年 3 月。

(3)調査方法

①調査依頼する大学・学部の抽出方法

『平成 19 年度版全国大学一覧』を用いて、看護系学部を設置している大学のみを選出。次に、掲載順に並べられた国公立大学と私立大学それぞれの学部に対して、無作為抽出法により標本を抽出し、看護系学部のみを排除した。

②学年の割り当て

大学の種別（国公私）ごとに並べ替え、看護系学部が隣接しないように配置し、1～5 の順番で番号をつけた。その番号の大学学部毎に調査を依頼した。

③調査依頼方法

各学部長宛に調査依頼を書面で行い、協力を承認した大学学部に対して調査票を郵送した。学年の割り当ては原則全学年としたが、学年を限定すれば回答可能と答えた大学に対してはその要望に合わせた調査を依頼した。調査票と回答用紙は別にし、郵送法によ

って回答用紙のみ回収した。

(4)調査内容

①基本属性

性別、大学種別、学年、学部、家族規模と構成。

②親子間の心理的距離

親子間の心理的距離を測る9項目（自分が取った行動に対して、父または母から今までに与えられた評価）は、「とてもほめられた＝4点～全くほめられなかった＝１点」までの4段階スケールで設定した。また、片親あるいは両親がいない場合は、「体験したことがない＝0点」の選択肢を設定した。尚、親子間の距離に関する質問項目は、父親の場合と母親の場合に分けて、それぞれ同じ質問項目を用いた。

③自己教育力

梶田（1985）の4つの側面「1．成長･発展への志向」「2．自己の対象化と統制」「3．学習の技能と基盤」「4．自信･プライド･安定性」を基本概念としている西村ら（1995）の自己教育力測定尺度（40下位項目）を基盤とし、プレ調査により学生対象としては適さないと判断した調査項目の削除と一部改編した36項目で構成し、「とてもそう思う＝4点～全く思わない＝1点」までの4段階スケールで設定した。また、4側面の尺度の信頼性はα係数0.9以上、下位項目でも0.6以上の範囲を確保した。

(5)分析方法

①基本属性の単純集計結果

②親子間の心理的距離の得点化と分類

親子間の心理的距離を測る9項目の各平均点および全体の平均点を算出した。次に、心理的距離が近いまたは遠い、の2群に分類するため、4および3の回答者は父親また母親から肯定的な関わりを受けた者＝肯定的評価群（心理的距離が近い）とし、2および1の回答者は否定的な関わりを受けた者＝否定的評価群（心理的距離が遠い）とした。

③自己教育力の得点化

自己教育力測定尺度［１．成長・発展への志向、２．自己の対象化と統制、３．学習の技能と基盤、４．自信・プライド・安定性］の4側面の平均点を算出した。

④看護学部生と他学部生の比較

①②それぞれに対して、看護学部生と他学部生をｔ検定により比較分析した。更に、自己教育力における父親・母親との心理的距離（肯定的評価群と否定的評価群）を看護学部生と他学部生に分けてｔ検定により分析し、4側面を比較検討した。Ｐ値が0.05未満を統計学的に有意とみなし、すべて両側検定とした。統計処理はSPSS17．0Ｊ for windows を使用した。

(6)倫理的配慮

本研究は学部長経由でアンケート用紙の配布・回収を行ったため、調査対象者に対しては、回答の自由意志を尊重すること、個人名やプライバシーを保証すること、また、研究で得られたデータは研究以外の目的には使用しないこと、何らかの支障が生じた場合は途中で協力を拒否する権利について文面で説明し、アンケート用紙の提出をもって同意とみなした。人権については、目白大学の2007年度特別研究として採択され、大学倫理委員会の承認を得たことで保障した。

４．研究成果

51大学55学部、6974人から有効回答があり、回収率は45.3%であった。

(1)結果

①基本属性（表1）

性別は､女性の対象が多く7割弱であった。学年別では、１年生が最も多く、4年生のデータ比率が他の学年に比べて低かった。大学別では、私立大学が 67.1%、国公立は合計で32.9%であった。家族規模では、核家族化の傾向は強いが、拡大家族（3 世帯同居）の割合も 34.3%と比較的高いという特徴がみられた。

表･･基本属性　　･･ ･････････数･

性別	男	32.(2231)
	女	67.9.(4734)
	n.a.	0.1.(9)
学年別	・年	31.1.(2169)
	・年	28.5.(1987)
	・年	22.3.(1556)
	・年	17.1.(1194)
	・・他	0.5.(34)
	n.a.	0.5.(34)
種別 大学	国立大学	25.0.(1743)
	公立大学	7.9.(551)
	私立大学	67.1.(4680)
規模 家族	核家族	61.8.(4313)
	拡大家族	34.3.(2398)
	n.a.	3.7.(263)
家族構成	父親	89.1.(6215)
	母親	94.5.(6589)
	祖父	18.5.(1292)
	祖母	31.6.(2207)
	一人･子	7.0.(488)
	二人兄弟	50.1.(3491)
	三人兄弟	38.1.(2659)
	四人兄弟以上	4.8.(336)

②親子間の心理的距離（表2）

父親から与えられた評価の全項目平均値は､4点満点中2.11±0.98､母親は2.53±0.89であった。　得点上位 3 項目は、父親では、１位「４．あなたが、父親に自分の嬉しい（又は楽しい）気持ちを伝えたとき」、2 位「１．あなたが、父親に優しい態度で接したとき」、

3 位「６．あなたが、父親を助けようと思い、態度や行動で示したとき」であった。母親は、1 位と 3 位が父親と逆の結果ではあったが上位 3 つは同じ項目であった。また、最も得点が低かった項目は、父母ともに「３．あなたが、父親（母親）に自分の落ち込んでいる（又は憂鬱な）気持ちを伝えたとき」であった。

・表・・親子間・心理的距離・親・・・評価・

項・・目	平均値	標準偏差
・・・・・・・父親・優・・態度・接・・・・	2.39	1.20
・・・・・・・父親・自分・意見・主張・・・・	2.09	1.07
・・・・・・・父親・自分・落・込・・・・・又・憂鬱・・気持・・伝・・・・	1.47	1.27
・・・・・・・父親・自分・嬉・・・又・楽・・・気持・・伝・・・・	2.40	1.28
・・・・・・・父親・話・聞・・・・・・・	2.22	1.21
・・・・・・・父親・助・・・・思・・態度・行動・示・・・・	2.33	1.37
・・・・・・・何・・決・・・・・父親・・自分・意見・聴・・・・・・・要求・・・・	1.76	1.24
・・・・・・・父親・立場・理解・・・・思・・態度・行動・示・・・・	2.01	1.34
・・・・・・・父親・意向・従・・・・	2.27	1.21
・・・・・父親・・・評価全項目平均	2.11	0.98
・・・・・・・母親・優・・態度・接・・・・	2.84	1.06
・・・・・・・母親・自分・意見・主張・・・・	2.34	1.01
・・・・・・・母親・自分・落・込・・・・・又・憂鬱・・気持・・伝・・・・	2.10	1.18
・・・・・・・母親・自分・嬉・・・又・楽・・・気持・・伝・・・・	2.73	1.12
・・・・・・・母親・話・聞・・・・・・・	2.59	1.11
・・・・・・・母親・助・・・・思・・態度・行動・示・・・・	2.86	1.14
・・・・・・・何・・決・・・・・母親・・自分・意見・聴・・・・・・・要求・・・・	2.15	1.15
・・・・・・・母親・立場・理解・・・・思・・態度・行動・示・・・・	2.57	1.20
・・・・・・・母親・意向・従・・・・	2.58	1.11
・・・・・・母親・・・評価全項目平均	2.53	0.89

・・・得点・高・・・心理的距離・近・・・・示・

③自己教育力（表 3）

自己教育力 4 側面の得点を比較すると、最も得点が高かった側面は「成長・発展への志向：3.04±0.40」、次いで「自己の対象化と統制：2.83±0.35」、「自信・プライド・安定性：2.70±0.32」の順で、最も得点が低かった側面は「学習の技能と基盤：2.69±0.38」であった。

④自己教育力・父親母親との心理的距離における看護学部と他学部の比較（表４）

父親との心理的距離得点の平均値における看護学部／他学部の比較では、2.14±0.99／2.07±0.97、母親との同比較では、2.60±0.87／2.47±0.90 で、父母ともに看護学部生において p＜0.0001～0.05 の確率で有意に高かった。

自己教育力全項目の平均値における看護学部／他学部の比較では、「１．成長・発展への志向：3.01±0.40／2.92±0.44」と「２．自己の対象化と統制：2.75±0.33／2.68±0.37」の 2 つの側面が、看護学部生において p＜0.0001 の確率で有意に高かった。また、「３．学習技能基盤：2.56±0.41／2.59±0.43」の側面は、他学部において p＜0.001 の確率で有意に高かった。「４．自信・プライド・安定性」は学部の違いによる差はなかった。

⑤自己教育力における父親・母親との心理的距離－看護学部と他学部の比較－（表 5）

自己教育力全項目の平均値における父親および母親の心理的距離の差について、看護学部生と他学部生の肯定的評価群と否定的評価群を比較してみると、看護学部生は、父親母親ともに肯定的評価群において p＜0.001～0.05 の確率で有意に高かったが、他学部生では肯定的評価群と否定的評価群の間に有意な差は認めなかった。

看護学部生では、父親からの肯定的評価群が、自己教育力の 4 側面すべて「１．成長・発展への志向：3.03±0.39」、「２．自己の対象化と統制：2.76±0.33」、「３．学習の技能と基盤：2.57±0.41」、「４．自信・プライド・安定：2.52±0.41」において p＜0.0001～0.05 の確率で有意に高かった。また、母親からの肯定的評価群が、2 側面「１．成長・発展への志向：3.03±0.39」、「４．自信・プライド・安定：2.51±0.41」において、p＜0.001～0.05 の確率で有意に高かった。これに対して、他学部生では、父親母親ともに 2 群間に有意な差は認めなかった。

(2)考察

①対象の属性について

性別は、全国の看護系大学を調査対象として意図的に抽出していることもあり、女性の対象が 7 割弱であった。学年別では、4 年生のデータ比率が低かった。これは就職活動や履修科目が少なく登校回数が減少していることなどが影響したと考えられ、4 年生は他学年と比べ 5～14%低い比率であった。大学種別では、全国の国公私立大学の比率と比較しても大差はなく抽出されていた。家族規模では、平成 17 年の国勢調査（2005）における核家族の割合（約 57.8%）と比較すると、やや核家族化の比率が高い半面、拡大家族（3 世帯同居）の割合は、平成 17 年の全国データ（約 12%）と比べ 3 倍近いという特徴がみられた。

本研究では、性別、学年、大学種別、家族規模の違いによる自己教育力と親子間の心理的距離との関連を分析するまでには至ってはいない。仮説としては、性別によって父親や母親との心理的距離には違いがある可能性や、学年差による学習進度の違い、あるは経験知の違いなどが影響する可能性、核家族と 3 世帯同居家族では人間関係に関するスキル習得との関連などが影響している可能性が考えられ、今後の研究課題として取り組む

表･･自己教育力･････　　　　･･逆転項目

	調査番号･･･････････････････項･･目	平均値	標準偏差
1 成長・発展・・思考	･･･他･ 人･ ･尊敬･･･人間･････	3.19	0.82
	･･･自分･ 能力･ 最大限生･････努力･･･	3.44	0.69
	･･･認･･･････自分･ 目標･ 向･･･努力･･･	3.15	0.75
	･･･自分･････････････････	3.19	0.81
	･･･自分･ ･･始･････ 最後･･･････	3.35	0.71
	････社会･ 出･ ･･良･ 仕事･･･多･･ 人･ 認･････	3.18	0.79
	････････････ 勉強･･･････････････	2.52	0.89
	･･････････何･ 考･･･ 過･･････････ 多･･･	2.87	0.87
	････人･ 人生･ 結局偶然･････決･･･思･･･	2.44	0.86
･･･成長･発展･ ･ 志向･平均		3.04	0.40
2 自己・対象化・統制	････自分･････････考･ 直･････心･････	3.01	0.71
	････他･ 人･ ･欠点･ 指摘････自分･ ･考･･･････思･	3.24	0.68
	･････････ 自分･ 押･･･ 他･ 人･ 合･････････	2.77	0.78
	･････････････････････････集中･････ 勉強･･･････････	2.84	0.93
	･････････････････････不機嫌･････････	2.70	0.82
	･････････････････････頑張･････	2.85	0.68
	････自分･ 行動･ 考･ ･ 批判･ ･･･腹･ 立･･･	2.31	0.75
	････自分･ 良･ ････悪･････････････	2.75	0.73
	････腹･ 立･･････････言･････････ 注意････	3.02	0.76
･･･自己･ 対象化･ 統制･平均		2.83	0.35
3 学習・技能・基盤	････自分･ 調･････････時･ 図書館･･･････････････検索･･ 利用････	3.28	0.80
	････他･ 人･ 話･ 聞･･･本･ 読･･････時･ 内容･ 振･ 返････････	2.41	0.86
	････自分･ 考･ ･ 深･ ･･広････････話･ 合･ ･ 討議･ 大切･････	2.64	0.82
	････考･･･････ 筋道立･ ･ 書･ ･･伝･･････	2.42	0.77
	････例･ 話･･･用･ ･人･･･････説明･････ 苦手･････	2.78	0.84
	････物事･ 比較･ ･ 客観的･ 評価･････	2.71	0.73
	････自分･ 必要･ 文献･ 資料･ ･分類･整理･･･習慣･ ･･	2.30	0.84
	････････････････････調･ ･･人･ 聞･････傾向･ ･･	2.91	0.78
	････他人･ 意見･ 行動･ 対･ ･･理論的･ 批判･･･ 苦手･････	2.73	0.83
･･･学習･ 技能･ 基盤･平均		2.69	0.38
4 自信・・・・安定性	･･･現在･ 自分･ 満足････	2.23	0.81
	･･･自分･ 自信･ 持････	2.10	0.78
	･･･自分･････････････	3.13	0.79
	･･･今･････ 自分･･･････思･	3.27	0.77
	････私･ 何･････････ 思･･･	2.30	0.86
	････自分･ ･ 色･････････思･	2.76	0.78
	････自分･ ･･･恥･････思･･･････	2.98	0.80
	････今･ 自分･ 幸福･ ･ 思･	2.94	0.84
	････生･ ･ 変･ ･･････････今･ 自分･ 生･････	2.56	0.93
･･･自信･･ ････安定性･平均		2.70	0.32
	････自己教育力項目･ 平均	2.81	0.27

表･･自己教育力･父親母親･･ 心理的距離････ 看護学部･ 他学部･ 比較･･

		学部	N	平均値		･値	標準偏差
心理的距離	･･･父親･･･評価平均値	看護学部	3136	2.14	**	.0023	0.99
		他学部	3728	2.07			0.97
	･･･母親･･･評価平均値	看護学部	3134	2.60	***	.0000	0.87
		他学部	3724	2.47			0.90
自己教育力	･･成長発展志向	看護学部	3163	3.01	***	.0000	0.40
		他学部	3718	2.92			0.44
	･･自己対象化統制	看護学部	3162	2.75	***	.0000	0.33
		他学部	3713	2.68			0.37
	･･学習技能基盤	看護学部	3156	2.56		.0063	0.41
		他学部	3693	2.59	**		0.43
	･･自信････安定性	看護学部	3164	2.50		.5360	0.42
		他学部	3720	2.49			0.45
	･自己教育力全項目平均	看護学部	3164	2.70	***	.0000	0.27
		他学部	3720	2.67			0.30

････････････････････

表・・自己教育力・・・・父親・母親・・心理的距離・・看護学部・他学部・比較・

自己教育力・側面	親	心理的距離	看護学部・・ N	平均値	・値	標準偏差	他学部 N	平均値	・値	標準偏差
・・成長発展志向	父親	肯定的評価群	1766	3.03	**	0.001	0.39	2121	2.92	0.901	0.42
		否定的評価群	1360	2.98			0.41	1620	2.92		0.49
	母親	肯定的評価群	1808	3.03	**	0.002	0.39	2170	2.92	0.581	0.43
		否定的評価群	1318	2.98			0.41	1565	2.92		0.44
・・自己対象化統制	父親	肯定的評価群	1765	2.76	*	0.012	0.33	2121	2.68	0.938	0.37
		否定的評価群	1360	2.73			0.33	1615	2.68		0.37
	母親	肯定的評価群	1807	2.75		0.216	0.33	2168	2.69	0.373	0.37
		否定的評価群	1318	2.74			0.34	1562	2.67		0.37
・学習技能基盤	父親	肯定的評価群	1761	2.57	*	0.047	0.41	2107	2.59	0.156	0.42
		否定的評価群	1358	2.54			0.41	1610	2.57		0.44
	母親	肯定的評価群	1804	2.56		0.947	0.41	2157	2.59	0.228	0.42
		否定的評価群	1315	2.56			0.41	1554	2.58		0.43
・・自信・・・・安定性	父親	肯定的評価群	1767	2.52	**	0.002	0.41	2122	2.50	0.337	0.43
		否定的評価群	1360	2.47			0.42	1621	2.48		0.46
	母親	肯定的評価群	1809	2.51	*	0.023	0.41	2171	2.50	0.136	0.44
		否定的評価群	1318	2.47			0.42	1566	2.48		0.45
自己教育力平均	父親	肯定的評価群	1767	2.72	***	0.000	0.27	2122	2.67	0.327	0.29
		否定的評価群	1360	2.68			0.27	1621	2.66		0.31
	母親	肯定的評価群	1809	2.71	*	0.016	0.27	2171	2.67	0.123	0.29
		否定的評価群	1318	2.69			0.28	1566	2.66		0.31

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

必要がある。

②親子間の心理的距離について

得点全体の両親の平均値を比較すると、父親よりも母親から肯定的な評価を返されていると認識している学生のほうが概して多いことが分かった。この結果は、中村や中里ら（2005）の中高生を対象とした両親に対する心理的距離の結果と同じ傾向を示した。また同研究では、女子学生のほうが年齢とともに母親との距離が近くなる傾向を報告している。したがって、大学生を対象とした本研究結果は、年齢を経ても、父親よりも母親のほうが心理的距離が近いという傾向が継続されている可能性が示唆された。

本研究の心理的距離の構成要素は、Nelson-Jones（1993）が開発した人間関係スキルトレーニング項目を基盤としている。これは“自分の行動に対して親がどの程度のストロークを返してくれていたか”を測定するもので、子供が両親からプラスのストロークを多くもらって育ってきた場合、親子間の距離は近く、思いやりのスキル、更には人間関係スキルが発達していると言われている。得点上位 3 項目は、「自分の嬉しい（又は楽しい）気持ちを伝えたとき」、「優しい態度で接したとき」、「助けようと思い、態度や行動で示したとき」で、どれも自分の前向きな思いやりの姿勢を親に対して示した行動であり、そうした行動にはプラスのストロークを返し易い傾向があると考えられる。逆に考えると、前向きな思いやりの姿勢を親に対して示せない子供は、親から肯定的な評価を受けにくいともいえる。これに対して、父母ともに最も得点が低かった項目「自分の落ち込んでいる（又は憂鬱な）気持ちを伝えたとき」は、前述とは逆で、親に対して、自分のマイナスな気持ちを励まして欲しいという行動を示しても、プラスのストロークを返される割合が最も低いことが分かる。したがって、この部分に対して、親は子供に意図的に関わることが重要だと考える。

③自己教育力について

大学生における自己教育力 4 側面の比較から、「1. 成長・発展への志向：3.04±0.40」、「2. 自己の対象化と統制：2.83±0.35」の得点が高く、「自信・プライド・安定性：2.70±0.32」、「学習の技能と基盤：2.69±0.38」は得点が低いという傾向は、先行研究である多久島ら（2006）の自己教育力に影響を及ぼす要因の分析において、保健科学部を専攻する 2 学科の大学生を対象にした研究の報告内容と一致する結果であった。本研究は標本数が多く、すべての学部学科から無作為に抽出している点から考えると、自己教育力に関しては大学生全体の傾向が示されたと考えられる。しかし、学習過程において、カリキュラムや学習環境・方法の違いによって経年的に差が生じる可能性があり、学部学科と学年別の変化についてさらにデータの分析を進める必要性がある。

④自己教育力・父親母親との心理的距離における看護学部と他学部の比較について

(i)父親母親との心理的距離における看護学部と他学部の比較

両親との心理的距離得点の平均値を看護学部と他学部とで比較した結果、父親母親と

もに看護学部生の方が有意に得点が高いことから、看護学部に所属する学生は他の学部学科生よりも親との心理的距離が近いと考えられる。看護職は、人間関係が重要視される職業であり、そこに興味を持ち共感したとすれば、看護師を目指して大学を選択した時点で、その学生にはこれまで育ってきた環境が強く影響しており、特に親の関わりはその中心を占めている可能性が高いと考える。

(ⅱ)自己教育力と心理的距離における看護学部と他学部の比較

看護学部生の方が他学部に比べて「１．成長・発展への志向」と「２．自己の対象化と統制」の得点が有意に高いという結果であった。これは、看護学部生は専門職を目指し、国家資格を取得する、という目的志向や達成・発展への意欲が強いという意志の現れであり、さらに自身の可能性や課題を認識し、そこへ近づけようとする対象化と統制能力が高い可能性が推察された。

次に、「３．学習の技能と基盤」の得点は、他学部生の方が得点が有意に高いという結果であった。これは、看護学部生が、論理的思考・客観的視点・情報収集能力と分類能力などの学習スキルにおいて他学部生よりも劣っている可能性を示唆している。要因としては、看護学科の教育カリキュラムは指定規則による必修科目の履修が卒業時に必要な履修科目の大半を占めており、この規程が影響して選択科目数の制限が起きているため、専門分野に特化した学習が中心となり、視野の狭まりや教育方法の画一化によって論理的思考・客観的視点・情報収集能力などが不足していると考えられる。

また、「４．自信・プライド・安定性」は有意な差はなく、看護学部と他学部の両群とも得点が低いという結果であった。これは、「不安・不全感・不安定性が強い」という現代学生の特徴を表した結果ではないかと考える。

⑤自己教育力における父親・母親との心理的距離－看護学部と他学部の比較－

自己教育力全項目の平均値における父親および母親の心理的距離の差について、看護学部と他学部それぞれの肯定的評価群と否定的評価群とで比較した結果、看護学部生は父親母親ともに肯定的評価群において有意に高かったが、他学部生では差は認めなかった。表４でも示しているように、平均点を比較すると看護学部生の方が高く有意である。したがって、看護学部生は他学部生よりも自己教育力が高く、その要因の１つとして、これまでに親から肯定的評価を受け親子間の距離が近い環境を形成してきたことが影響していると考えられる。しかし、看護学部生以外の学部全てが自己教育力が低いという事は考えにくく、看護学部と同じような要因を持つ学部、あるいは異なる要因によって自己教育力が高まる可能性も考えられ、今後の課題として取り組んでいく必要がある。

看護学部生では父親からの肯定的評価群が、自己教育力の４側面すべてにおいて有意に高く、母親からの肯定的評価群では、「１．成長・発展への志向」と、「４．自信・プライド･安定」の２側面だけが有意に高かった。これに対して、他学部生では、父親母親ともに２群間に有意な差は認めなかった。これは、中村や中里ら（2005）の研究報告にある、中高生は母親よりも父親との心理的距離の方が遠く、更に女子学生は加齢に伴って親との距離が縮む傾向と関係があるのではないかと考える。つまり、大学生に成長した女子学生が父親との心理的距離をより縮めている可能性があり、更に看護学部では男女の比率において圧倒的に女性が多いことから、父親の肯定的評価がこの分析結果に大きく影響しているのではなかと推察された。

(3)結論

看護学部生は目的志向が高く、さまざまな人間関係に身をおき自信やプライドを揺るがされながら成長・発展していこうとしている状況が明らとなった。このような傾向は、専門職を目指す看護学部生は他学部生よりも、青年期の成長発達過程において両親が与える評価、特に肯定的な評価を受けていることを強く認識しており、親との心理的距離が近いことが要因の一つであると推測された。また、それが自己教育力の向上に影響しているという特徴が示唆された。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 小林紀明、看護大学生の自己教育力と親子間の心理的距離との関連－看護学部と他学部の比較－、目白大学高等教育研究、査読有、第 17 号、2011、69-77

〔学会発表〕（計３件）

① 小林紀明、看護大学生の自己教育力と親子間の心理的距離との関連に関する一考察、第 28 回日本看護科学学会、査読有、2008.12.14

② 小林紀明、看護大学生と他学科大学生の自己教育力構成要素の比較、第 29 回日本看護科学学会、査読有、2009.11.28

③ 小林紀明、看護大学生の自己教育力と親子間の心理的距離との関連－看護学部と他学部の比較－、査読有、第 30 回日本看護

科学学会、2010.12.4

〔図書〕（計０件）
〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
　小林　紀明（KOBAYASHI NORIAKI）
目白大学・看護学部・看護学科・准教授
　研究者番号：10433666